
カカシの家/カカシカ

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カカシの家／カカシカ

【Nコード】

N6770A

【作者名】

深海

【あらすじ】

カカシの家にシカマルが遊びに行きました。

「さあ、どつぞどつぞ。」

「お邪魔します…。」

わざとらしく手を広げ家に招き入れるカカシに、初めて足を踏み入れ物珍しそうにキョロキョロするシカマル。今日はシカマルがカカシの家に遊びに来ていた。

「男の一人暮らしにしちゃ綺麗だな…。」

きちつと片付けられたシンプルなカカシの家。綺麗だが、どこか寂しさも感じられる。

「俺綺麗好きだからね。」

自分を指さしニコニコするカカシを無視しどんどん奥へ進む。

「広いな…。ここは何だ？」

覗いた部屋は忍術書や巻物が綺麗に並べられていた。

「うわ…すげー。アンタちゃんと修行してたんだな。」

「もうー。無視しないでよ。修行するのは当たり前でしょ。俺が何もしないで強いとも思ってたの?」

堂々と自らを強いと言うカカシに苦笑いするシカマル。実際強いのだから何も言えないが…。

「ウロウロしてないでゆっくりくつろぐつよ。」

シカマルの背中を軽く押し、居間へ案内する。

半ば無理矢理シカマルをソファに座らせると、カカシもシカマルの横に並んで座る。スペースは十分あるのに何故が大分密着している。

「な…何だよ…。」

密着され居心地悪そうにモゾモゾ動くシカマルを、微笑み見つめる。

「何だつつつてるだろ…。」

何も言わずに自分を見つめるカカシを怪訝そうに見言っが、カカシは視線をそらさずに相変わらず微笑み見つめ続ける。

「つつたく…。」

たまらずにシカマルから目をそらすと、カカシがいきなり抱きついた。

「一人暮らしの男の家に来るってことは、覚悟出来てるんだよね？」

「は？」

「さっ 善は急げだ！」

力強く言つとシカマルを両手で軽々抱え立ち上がる。

「うわっ！ ちよっ… 何だよ！」

カカシは訳がわからずただ驚いているシカマルをルンルン気分で寝室へ運ぶ。

ガチャツと寝室のドアが開けられベッドが目に入る。カカシが言っていたことの意味がようやくわかり、シカマルは青くなった。

「おい！ 何考えてんだよ！」

「何考えてって… ナニでしょ？」

ニヤニヤ笑いながら答えるカカシに小さく溜息をもらす。

「いいから降ろせよ…。」

「言われなくても！このままじゃ何もナニも出来ないからね。」

一人でクスクス笑いながらシカマルをベッドに降ろすと飛びかかる。

「シカマルー！」

「いつ！？うわっ 待て待て！」

シカマルの制止虚しくカカシが馬乗りになりシカマルにキスする。

「んーっ…！」

力の限り暴れるシカマルを難なく押さえ込む。

「優しくするからね。」

ニツコリと微笑み言うカカシにシカマルは真っ青になる。
こうして二人はめでたく(?)初めてのナニを…

「この変態上忍がああ!!」

隣近所にまで響きわたったシカマルの叫び声。ボタンと勢いよくドアが開き不機嫌なシカマルが飛び出して走り去る。室内にはシカマルにある部分を蹴りあげられ悶絶する変態上忍一人…。
二人の初めてのナニはまだまだ先のようです。

「終」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770a/>

カカシの家/カカシカ

2010年10月16日03時08分発行